

# KYOKY

128

**特集** 教員養成高度化に対応する附属学校の  
教育実習スーパースクール化構想



京都教育大学

**<表紙>**

**『タルト』**

**3年4組 高尾 沙織**

この作品は初めて油絵に挑戦したときの絵です。

油絵を描くにあたって、タルト生地の色を出すことが難しかったです。

試行錯誤を繰り返して、大好きないちごタルトを満足のいく作品にすることができました。

**<裏表紙>**

**『スプーンに映った顔 — もう1人の自分 —』**

**1年1組 島崎 優奈**

白一色で濃淡をつけるのは予想以上に難しく、迷いながらの作業。

しかし、実物（自分）と正面から向き合うことができ、楽しんで描くことができました。



# CONTENTS



<表紙> 附属高等学校 3年 高尾 沙織  
<裏表紙> 附属高等学校 1年 島崎 優奈

## 特集

- 2 教員養成高度化に対応する  
附属学校の教育実習  
スーパースクール化構想  
プロジェクト座長  
徳岡 慶一

## 海外見聞録

- 7 韓国魂の歌～パンソリ探訪記  
音楽科教授  
垣内 幸夫

## 留学生の声

- 9 日本、私の世界の扉  
日本語・日本文化研修留学生  
SALMA INTIFADA  
サルマ・インティファダ  
(インドネシア出身)

## 研究余滴

- 10 砂丘のアリジゴクとつき合って  
理学科教授  
松良 俊明

## 京教今昔物語

- 12 80年代の思い出  
体育学科教授  
和田 尚

## 京教学内探訪

- 14 ホンドギツネ@京都教育大学  
理学科教授  
梶原 裕二

## 附属学校園だより

- 15 子どもたちの9ヶ年の育ちを見つめる  
附属京都小中学校  
初等部副校長  
戸田 和樹
- 16 ロボカップ世界大会2位  
(ジュニアサッカーB部門)  
附属高等学校副校長  
齋藤 正治
- 17 中学部 白馬修学旅行  
附属特別支援学校副校長  
春原 克彦

## 新任の先生から

- 18 保健管理センター教授  
森 孝宏
- 18 教育支援センター教授  
桶谷 守
- 19 教育支援センター准教授  
小林 稔

## 卒業生の声

- 20 大学生活での三つの目標を振り返って  
東大寺学園中高等学校・教諭  
安井 直人
- 20 人に育てられる、そして人を育てる  
附属京都小中学校・教諭  
梅村 万里子

## ようこそ大先輩

- 21 「やまなし」の白い石  
京都教育大学名誉教授  
井本 伸廣

## 読者の皆さまへ・編集後記

- 23 地域連携・広報委員会委員長  
細川 友秀

# 教員養成高度化に対応する附属学校の教育実習スーパースクール化構想

プロジェクト座長 徳岡慶一

## 1. はじめに

現在、教員養成の高度化については、中央教育審議会に設置された「教員資質能力向上特別部会」において検討されています。平成22年6月3日、川端達夫文部科学大臣（当時）は、同部会に対して「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」検討するように諮問しました。

約8ヶ月にわたる審議を経て、今年1月31日に同部会は、『教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（審議経過報告）』を提出しました。この経過報告では、教職生活全体を通じて教員の資質能力向上を図ることを支援する制度に改革することを提案しています。具体的には、次の2点です。

### 1 「基礎免許状（仮称）」「一般免許状（仮称）」創設の検討

当面は、学士課程修了者に基礎的な資格（「基礎免許状（仮称）」）を付与し、教員採用後に、必要な課程等を修了すれば修士レベルの資格（「一般免許状（仮称）」）を付与することも含め、教員養成の修士レベル化について検討すること

### 2 「専門免許状（仮称）」創設の検討

教職生活を通じて、より高い専門性と社会性を身

につけることを支援するため、一定の専門性（\*）を公的に証明する「専門免許状（仮称）」の創設について検討すること

（\* 学校経営、生徒指導、教科指導、特別支援教育など）

## 2. プロジェクトの概要

教員養成高度化の議論は、養成期間4年+ $\alpha$ といわれる教育実習の充実としての長期化の議論を含んでいます。さらに教育現場への教育実習の大幅な展開を意味しており、公立学校での教育実習は大きく増加する見通しです。そのため公立学校教員の教育実習指導力の向上が必要です。

そこで本プロジェクトでは、毎年多数の教育実習生を受け入れて指導しており、教育実習指導法に関する豊富な蓄積がある附属学校を教育実習のスーパースクールと位置づけ、大学教員と附属学校教員が協働して京都教育大学教育実習指導モデル（京教大モデル）を開発し、地域の公立学校に発信して、公立学校教員の教育実習指導力の向上を支援することを目指しています。事業計画期間は、平成23年度～平成25年度の3力年です（図1）。

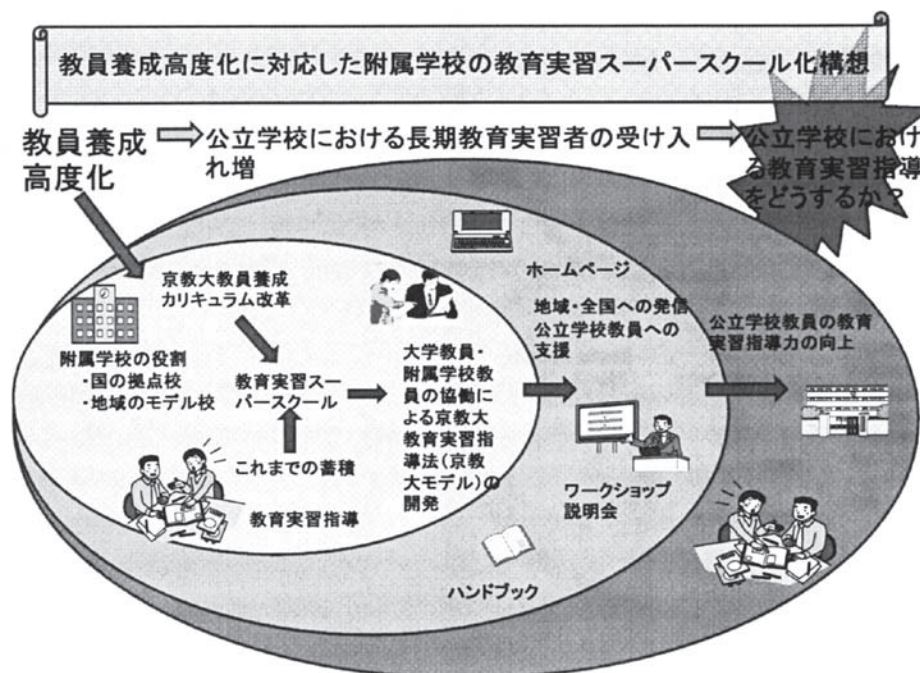


図1 プロジェクトの概要図

### 3. プロジェクトの意義

教員養成高度化に対応したシステム作りは各地で行われていますが、高度化に対応した教育実習指導法の開発は遅れています。また教育実習指導法は、これまで現場任せであり、現場での試行錯誤によって経験が蓄積されている一方で、ほとんど研究されておらず、共有化は遅れています。さらに公立学校においては、教育実習指導に対する組織的対応は十分ではありません。

一方、本学の附属学校では毎年本学の教育実習生を全員受け入れてきた実績（全国の教員養成系大学・学部で4大学・学部のみ）があり、すぐれた教育実習指導法が蓄積されています。そこで今回、大学教員と附属学校教員とが一体となり、①附属学校教員がこれまで蓄積した教育実習指導法のノウハウを共有化し、②教員養成高度化に対応した教育実習指導法を開発し、公立学校に発信して、公立学校教員の教育実習指導力の向上を支援する、の2点に本プロジェクトの独自性・新規性があります。

さらに本プロジェクトでの取り組みは、文部科学省が平成21年3月にまとめた『国立大学附属学校の新たな活用方策等に関する検討とりまとめ』において附属学校の存在意義（役割）として示された、①先導

的・実験的な取組を中長期的視点から実施し、関連する調査研究を推進する「拠点校」として、国の教育政策の推進に寄与すること、②地域の教育界との連携協力の下に、地域の教育の「モデル校」として、地域の教員の資質・能力の向上、教育活動の一層の推進に寄与すること、の2点に合致するものです。

### 4. 全体計画

教員養成高度化に対応して、本学では、実践的指導力を身につけさせるためのカリキュラム改革化を構想しており、本プロジェクトはその中に位置づくものです。

具体的には、大学と附属学校教員とが一体となり、①学部レベルに対応する教育実習指導法の抽出と共有化を目指します（1年目）、②高度な専門能力、実践力、課題対応能力を合わせ持つ教員を養成するための大学院レベルの教育実習指導法を検討します（2年目）、③附属学校教員がこれまで蓄積した教育実習指導法のノウハウを共有化し、地域の教育委員会と連携して地域の公立学校を支援します（3年目）。

### 5. 推進体制

本プロジェクトの実施体制は、図2の通りです。本

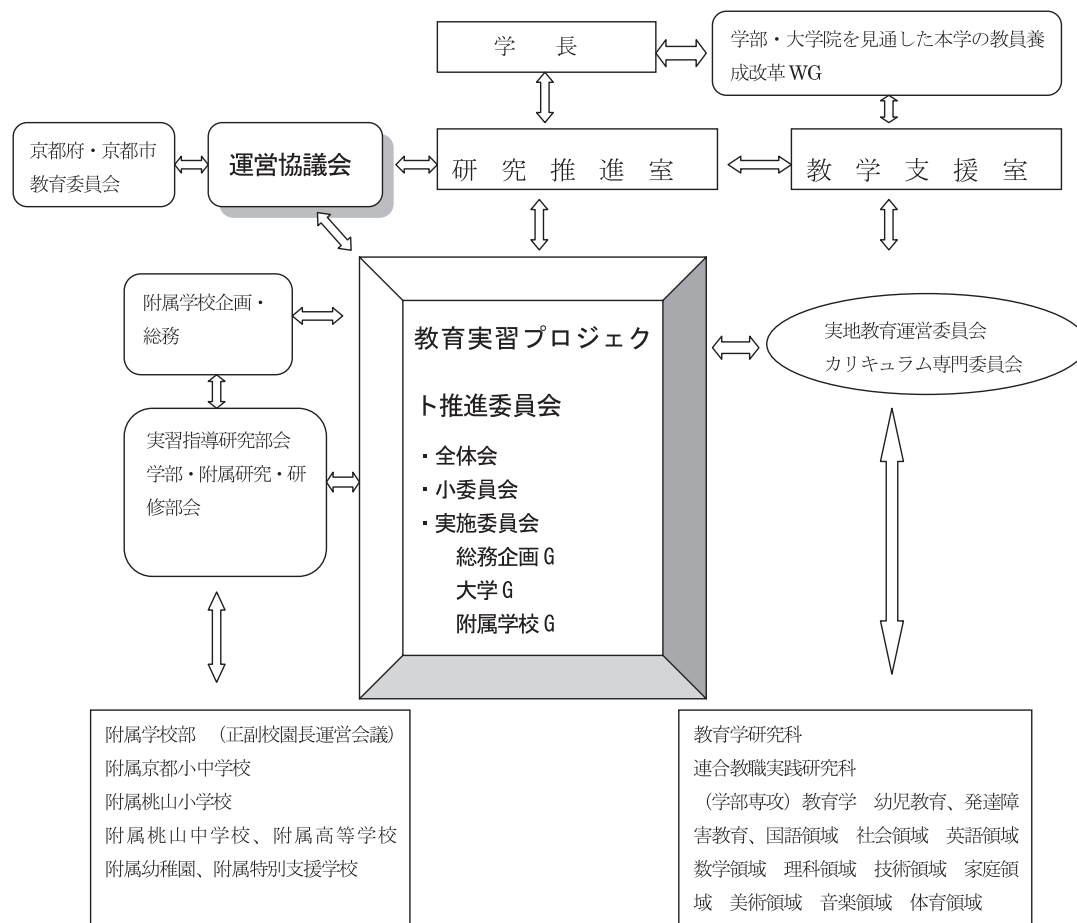


図2 プロジェクトの推進体制

プロジェクトは、学長のリーダーシップの下、関係する研究推進室、教学支援室の2つの法人室、関係する委員会、学部、大学院、附属学校が参加しています。

その中心は、「教育実習プロジェクト推進委員会」です。本委員会は、全体会、小委員会、実施委員会の3つの組織から構成されています。

全体会は、本プロジェクトの最高決定機関です。メンバーは次の通りです（表1）。

小委員会は、本プロジェクトの企画や総務を担当する委員会です（表2）。

実施委員会は、本プロジェクトの研修づくり等の実務を担当する委員会で、総務企画、大学、附属学校の3グループから構成されています（表3）。

また京都府教育委員会、京都市教育委員会との連携が重要なことから、全体会に両教育委員会から派遣されている2人の特任教員が参加しています。

表1 全体会メンバー

責任者	安東茂樹	教務・学生指導担当副学長
責任者	饗場知昭	教育実践担当副学長・附属学校部長
座長	徳岡慶一	教育学科
副座長	湯川夏子	企画調整室・家政科
委員	村上忠幸	研究推進室・理学科
委員	渡邊伸樹	研究推進室・数学科
委員	石川 誠	教学支援室・社会科学科
委員	水山光春	教育実践センター機構長・社会科学科
委員	小林 稔	実地教育運営委員会・教育支援センター
委員	斉藤百合子	音楽科
委員	竹花裕子	特任教員・教育支援センター
委員	桶谷 守	特任教員・教育支援センター
委員	山下宏文	附属高校校長・社会科学科
委員	郷間英世	附属特別支援学校校長・発達障害学科
委員	森山卓郎	附属幼稚園園長・国文科
委員	橋本雅子	附属京都小中学校副校長
委員	西井 薫	附属桃山小学校副校長
委員	斉藤正治	附属高等学校副校長
委員	戸田 啓	附属学校部

表2 小委員会メンバー

責任者	安東茂樹	教務・学生指導担当副学長
責任者	饗場知昭	附属学校部長
座長	徳岡慶一	教育学科
副座長	湯川夏子	企画調整室・家政科
委員	村上忠幸	研究推進室・理学科
委員	小林 稔	実地教育運営委員会・教育支援センター
委員	坂東忠司	附属桃山小学校校長・理学科
委員	斉藤正治	附属高等学校副校長
委員	戸田 啓	附属学校部

表3 実施委員会メンバー

企画・運営G	饗場知昭	
	村上忠幸	徳岡慶一
	湯川夏子	渡邊伸樹
	斉藤百合子	小林 稔
	戸田啓（事務補佐）	
大学G		
学科	氏名	/
教育学科	岡部美香	
発達障害学科	佐藤克敏	
幼児教育科	平井恭子	
国文学科	森山卓郎	
社会科学科	土屋雄一郎	水山光春
数学科	佐竹伸夫	渡邊伸樹
理学科	谷口和成	中野英之
音楽科	田中多佳子	斉藤百合子
美術科	安江 勉	村田利裕
体育学科	中比呂志	小松崎敏
産業技術科学科	多田知正	土屋英男
家政科	湯川夏子	榊原典子
英文学科	児玉一宏	西本有逸

附属学校園G		
学校園	副校長	主幹教員
附属京都小学校	戸田和樹	星尾尚志
附属桃山小学校	西井 薫	児玉裕司
附属京都中学校	橋本雅子	垂井由博
附属桃山中学校	高木英男	藤原みつる
附属高等学校	斉藤正治	市田克利
附属幼稚園	鍋島恵美	/
附属特別支援学校	春原克彦	/

## 6. 今年度の取り組み

プロジェクト初年度の今年度の取り組みは、表4の通りです。

- ① 各附属学校における教育実習についての基礎的資料を得るために、主幹教諭及びOB教員に対する面接調査を行います。
- ② 今年度の中心は、来年度当初に附属学校で実施する校内研修のためのコンテンツ収集とプログラ

ムの作成です。6月の主免実習、副免実習での試行的なコンテンツ収集の成果と課題を踏まえ、9月実習でのコンテンツ収集に取り組んでいるところです。実習指導の過程における実習生の「変容をとらえる」ために10月末をめどに、9月実習の整理を行います。実習の指導過程における実習生の変容過程を実習生の授業のビデオ、事後指導の映像、実習記録、実習生・指導教員へのインタ

ビューなどを総合的に活用して把握します。そして12月末をめどに、変容の場面の分析および変容に関わる要素の分析を行います。その過程において11月ごろには、実施委員会+指導教員+TAをメンバーとする研究会を立ち上げ、変容の場面の分析に関しての情報交換を行い、その成果を反映させます。

- ③ 随時、本学の他附属校での研修や、先進的な取り組みを行っている他大学（例 上越教育大、福井大、東京学芸大、横浜国大、近畿圏等）において附属学校教育実習に関する情報収集を行うことを計画しています。また来年3月には、先進的な取り組みを行っている諸外国（例 フィンランド、英国）の教員養成の状況についての調査を予定しています。
- ④ 来年3月には、シンポジウムを開催し、教育実習スーパースクール化構想1年目の成果と課題について明らかにします。
- ⑤ 来年4月には学校ごとに、「教育実習における実習生の変容をめぐる」というテーマでの研修

を行います。形式としては、ミニシンポ形式で、研修チーム（指導教員+ビデオチーム）+対象実習生の参加を予定しています。内容としては、対象学生の変容についてビデオ、ボイスレコーダー、実習ノートなどを用いて、変容の場面と要素についての参加者の理解を深めます。

- ⑥ 特別支援学校での教育実習を本プロジェクトで共有するための検討を行います。来年2月に行われる副免実習において小・中・高と同様の取り組みについての試行を行うかどうかも含めて、その具体について今後協議を進めます。
- ⑦ 幼稚園での来年度の実習において小・中・高と同様の取り組みを実践します。今後協議を進めます。
- ⑧ 来年度は附属学校で実習を行っている本学の大学院生に対する指導を検討することになっているので、今後2つの研究科と協議を進めます。
- ⑨ 京都府教育委員会、京都市教育委員会との協議を今後進めます。

プロジェクト	2011年度					2012年度								
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
教育実習			主免実習 (小・特別 支援)・副 免実習(小・ 中・高)				主免実習 (幼・小・ 中・高)				副免(特別 支援)			
①面接調査	主幹教諭・ OB教員	主幹教諭・ OB教員	主幹教諭・ OB教員	主幹教諭・ OB教員	主幹教諭・ OB教員									
②ビデオ・ ボイスレコー ダー	面接の状況	面接の状況	主免、副免 の授業およ び指導	面接の状況	面接の状況	主免の授業 および指導								
③校内研修		実施委員会 立ち上げ					研修プログラ ムへ向けての ビデオの整 理・分析	研修プログラ ムへ向けての ビデオの整 理・分析	研修プログラ ムへ向けての ビデオの整 理・分析	校内研修プ ログラムの 作成	校内研修プ ログラムの 作成	校内研修プ ログラムの 作成	校内研修	
④校外研修 (本学)		随時	随時	随時	随時	随時	随時	随時	随時	随時	随時	随時	随時	随時
⑤校外研修 (他大学)		随時	随時	随時	随時	随時	随時	随時	随時	随時	随時	随時	随時	随時
⑥海外研修											フィンラ ンド・英国			
⑦整理・分 析		面接調査か ら実施内容 の項目の整 理具体化		研修プログラ ムへ向けての ビデオの整 理・分析	研修プログラ ムへ向けての ビデオの整 理・分析	スタンダ ードの関連と 指導・評価							校内研修か ら出た課題 等の整理・ 分析	
備考	附属学校へ の説明	教授会で説 明	教育研究交 流集会(6.1)				附属特別支 援学校で説 明				講演会	シンポジウム		

表4 2011年度の計画



# 韓国魂の歌～パンソリ探訪記

音楽科教授 垣内幸夫

筆者が初めてパンソリの生演奏を聴いたのは、2008年3月22日の金美那「赤壁歌完唱発表会」であった（会場はソウル特別市瑞草区にある国立国楽院牛眠堂）。パンソリの演奏中に、聴衆が絶妙の間に「オルシグ」「オルス」「クロッチー」「チョッター」などの掛声（チュイムセ）を掛けていた。聴衆の中には若い人も多く交じっている。この時、聴衆と一体化したパンソリの舞台に魅了され、その衝撃が筆者を突き動かした。以来、パンソリ行脚の日々が続いている。

パンソリは朝鮮半島南部の全羅道を中心に発展した民俗芸能の一つで、一人の歌い手（ソリックン）が鼓手（コス）の叩く太鼓と掛声の伴奏に合わせ、歌とせりふ、身振り（ノルムセ）を交えて長編の物語を演唱していく語り物音楽である。パンソリ発生当時は十二のマダン（場面）が存在したが、現在は五つのマダンのみが伝承されている（『春香歌』『沈晴歌』『興甫歌』『水宮歌』『赤壁歌』）。

2008年9月11日に再び韓国を訪れ、『春香歌』の舞台となった南原市を訪ねた。主人公の春香がブラン

コに乗っているところを、李夢龍が見染める「廣寒楼」は、南原を代表する史跡として多くの人々が訪れ日々賑わっていた（写真1）。



写真1 廣寒楼

その近くに広大な「春香テーマパーク」がある。映画『春香伝』の撮影を行ったロケ地が、テーマパークとして一般に公開されていた（写真2）。



写真2 春香テーマパーク

最後に、南原市郊外の山中にある宋興禄（1800～1863）の生家を訪れた（写真3）。宋興禄は19



写真3 宋興禄生家

世紀に活躍したパンソリの名唱で、演者の感情を抑制した雄壮さの表現を特徴とする東便制という流派の創始者である。

次に訪問したのが、全州市にある全羅北道立国楽院。突然の来訪に快く応じて下さった金美貞（1966～）教授



写真4 全羅北道立国楽院

との出会いが、その後のパンソリ研究の展望を大きく拓いてくれた（写真4）。急な来訪者である筆者に対し、金美貞教授はとても親切に対応して下さい、筆者のパンソリ研究への協力を惜しまないと言って、深い理解を示して下さい（写真5）。



写真5 金美貞教授

私は日本伝統音楽の義太夫節（人形浄瑠璃のための三味線音楽）を37年間研究してきた。現在は東アジアの語り物音楽の声の技法に関する比較研究を進めている。その対象は韓国のパンソリと中国蘇州・上海の評弾、そして日本の義太夫節の語りである。幸いなことに、この研究に対して2009～2011年の3年間、科学研究費の補助を受けることができた。

科研費の調査として、2009年8月18日～20日の3日間、金美貞教授のパンソリクラスに参加した。そして、同行した通訳（沈修智＝春川教育大学校からの留学生）を交えて、金美貞教授に対するインタビューを行った（写真6）。インタビューについては

科研費の研究結果として後日公表する予定。筆者が参加したパンソリクラスの3日間の日程は以下の通りであった。



写真6 金美貞教授へのインタビュー

- ① 1日目 2009年8月18日  
10時～中級クラス (a-1)

11時～初級クラス (b-1)

13時30分～個人指導

14時～初級クラス (c-1)

15時～中級クラス (d-1)

② 2日目 2009年8月19日

10時～中級クラス (a-2)

11時～初級クラス (b-2)

13時30分～個人指導

14時～初級クラス (c-2)

15時～中級クラス (d-2)

③ 3日目 2009年8月20日

10時～中級クラス (a-3)

11時～初級クラス (b-3)

(\*午後ソウルに移動)

次に1日目の授業について簡単に紹介しておこう。

10時～中級クラス (a-1) 教室に入ってまず驚いたのは生徒の人数の多さであった (写真7)。数えてみたら25人いた。

このクラスには若い人や子供はいない。最初に全員で『春香歌』を歌う。授業の後半では金



写真7 授業風景

教授が『興甫歌』を短く区切って歌い、生徒がテキストを見ながらそれをまねた。生徒は金先生の細かい表現を1フレーズずつ真剣にまねていた。

11時～初級クラス (b-1) このクラスは少人数で、その中に小学生の少女が一人いた (金教授のご配慮により、この時間から筆者も練習に参加した)。全員がチュンモリ長短を太鼓だけでしばらく練習していると、突然先生が歌いだした。先生は口唱歌を唱えながら教室を回り、生徒一人ひとりに対して撥の持ち方や叩き方を指導されていた。

13時30分～個人指導 この時間は生徒の一人が個人指導を受けていた。まず金教授がテープレコーダーに範唱を録音。曲は『春香歌』の一節 (8分) である。金先生は太鼓を打ちながら表情豊かに歌う。筆者にも細かい声の技法がよく聴き取れた。

14時～初級クラス (c-1) このクラスには最年少の小学生の少女が二人と少年一人がいた。参加人数は11人。授業の冒頭から歌の練習が始まった。太鼓は金教授が一人で打ち、みんなは大きな声で歌っていた。

15時～中級クラス (d-1) 中級クラス (a-1) の殆どが男性だったのに対し、このクラスは女性の割合が多く、生徒は全部で13人 (男性は4人) だった。そ

の中に一人の女子高生がいた。彼女が2009年に泗川全国パンソリ大会高等部大賞 (教育監賞) を受賞し、同年5月に「春香歌 (全篇) 完唱発表会」を終えたばかりの陳殷永 (1991～) である (写真8)。陳殷永の表現力豊かな力強い歌声が印



写真8 陳殷永

象的であった。陳殷永は全くテキストを見ていない。懸命に金教授の表情を凝視している。このクラスが終わった後、金教授は陳殷永に『春香歌』を歌うようにいった。聴衆は筆者一人である。陳殷永は感情を込めて歌い、ただ一人の聴衆のために彼女の『春香歌』を披露してくれた。

パンソリの本場である全羅道全州市でのパンソリ学習者の層の厚さが、この芸能の享受者の質を高め、パンソリ芸術の発展を支えていることを実感した。同時に、パンソリが韓国人の魂の歌であるということが理解できた。

ソウルでは、資料収集のため必ず国立国楽院にある音楽専門ショップに立ち寄り、DVD/CD/音楽書/楽譜/楽器を購入する。顔馴染みとなったオーナーは、いつもディスカウントしてくれるのでとても助かっている。また地下鉄「光化門駅」に隣接する韓国最大の書店教保文庫にも毎回足を運び、研究に必要な書籍やDVD/CDを購入して帰る。今筆者の手元にあるパンソリ関係のCDと書籍のコレクションは、個人蔵としては日本一ではないかと自負している。

景福宮 (光化門) からまっすぐ伸びた世宗路 (教保文庫前) 近くに、朝鮮の英雄・李舜臣 (1545～1598) の銅像が立っている (写真9)。17世紀の壬申の乱 (文禄・慶長の役) において豊臣秀吉の送った日本軍に対し、朝鮮水軍を



写真9 李舜臣銅像

率いて壮絶な戦いを繰り広げた李舜臣将軍は、秀吉の死後朝鮮を引払う日本軍を追い詰めていた最中に、朝鮮の役最後の大規模海戦である露梁海戦において、日本軍の銃撃によって非業の死を遂げた。李舜臣については金薫著、蓮池薫訳『孤将』 (新潮社、2005年) を一読されたい。

# 日本、私の世界の扉

日本語・日本文化研修留学生 SALMA INTIFADA  
サルマ・インティファダ（インドネシア出身）

紅葉やイチョウなどの葉っぱが黄色、赤になることは去年の秋に日本で初めて見ました。空から舞い落ちた真っ白い雪の冷たさも日本で初めて感じ、また、桜やチューリップ、ラベンダーの花畑など、自分の国で見たことのない花々も日本で初めて見ました。雨季と乾季しかない国から来た私にとって、景色などが変わる日本の四季は不思議なことだと思います。日本にいるのは一年間で短いですが、春夏秋冬の美しさを自分の目で見る事ができて、嬉しくてこの一年間の思い出を一生の宝物として大切にします。



私は子どものころからよく日本のアニメを見たり、マンガを読んだりしていました。そのきっかけで日本に興味を持って、ずっとこの国に憧れていました。そのときの私は「いつか日本に行って、アニメやマンガについて勉強しよう」と考えて、進学を決めるときも日本語学科に入ることにしました。三年間大学で日本語を勉強して、やっと日本に行くチャンスが来ました。

2010年10月、秋の涼しい風とともに、日本での生活が始まりました。海外へ行くのは初めてで、家族とも遠く離れていて、来たばかりのときは不安な気持ちを感じました。でもその後は日本人の友達や他の国から来た新しい友達が出てきて、日本の生活に少しずつ慣れてきました。色々な新しいことも勉強し始めて、楽しい毎日が続いていました。習い始めたことの中で、大好きなのは日本の華道と書道でした。

私は花が好きで、日本の生け花はとてもきれいで素敵だと思って、習うことにしました。上手ではないのですが、今では自分で花をアレンジしたりすることができるようになって、すごく嬉しいです。毎週自分でアレンジした花を部屋の机の上に飾って、その花を見たら心が落ち着きます。書道もそうです。インドネシアでは書道のように筆で字を書く文化がないので、初めて筆で字を書くときはなかなかきれいに書けませんでした。でも、書くときは心が落ち着いて、気持ちが良いです。

大好きな日本のアニメやマンガについても勉強したかったのですがあまり機会がありませんでした。結局、京都国際マンガミュージアムでボランティアとして活動し始めました。そこでは、外国から来たお客様の館内ツアーを案内したり、インドネシア語のマンガに関するデータを訳したりしました。私はもともと人

前で話すのが苦手で、ガイドになれるとは全然思いませんでした。それに、お客様は色々な国から来たので、母国語ではなく、英語で案内しなければなりません。英語のネイティブでもないのに英語で説明しなければならなくて、自信がなく心細かったです。でも、マンガについてのインフォメーションはそこに山ほどあるから勉強に良いと思います。色々な人とも出会えるから、つらいときもあるけれど、楽しい時間もたくさん過ごせました。京都のマンガミュージアムでボランティア活動をしたことは一生忘れられない思い出になると思います。

日本に留学することは自分の成長ともつながっているのではないかと思います。留学する前の21年間の私の人生は、ずっと狭い世界の中で過ごしてきました。留学することを通じて世界の広さを感じて、その広い世界の色々なところから来た人々と直接に話したり、友達になったり、自分の国とは全く違う文化を学んだりすることができました。自分の国にいるときはもちろん外国人もいましたが、用事がないのでなかなか声をかけることができませんでした。結局外国人を見るときは遠慮して、声をかけたいときも緊張しすぎて、何も言えなくなりました。でも今は違います。どこの人でも、どんな文化を持っていても、話し合ったり理解したり、みんな友達になることができます。今の皆さんと出会えて、本当に良かったです。たくさんの優しさもいただいて、心から感謝しています。日本での出会いはいつまでも大切にしたいと思います。

日本に留学することを通じて、新しい友達、知識や勉強だけではなく、新しい冒険も始まる気がします。日本に来る前、旅行はあまりしなかったのですが、せっかく日本に来たからと思って色々なところへ行ってみました。関西はもちろん、北海道から関東、中部、広島まで行きました。夏休みにも九州へ行くつもりです。この一年間、色々なところへ行っていて、日本はどんな国かをもっと分かるようになりたいです。

そして、できれば日本だけではなく、これからも世界中の色々なところへ行ってみたいと思います。世界の広さを自分で感じて、色々な人と出会いながら色々なことを学んで行こうと思っています。もし日本に留学しなかったら、私は今自分と関係のないものに興味を持たず、まだまだ自分の小さい世界の中で生き続けているかもしれません。私にとって、日本に留学するということはちょうど世界の扉を開けるようです。日本に来ることをきっかけに、「外国」や「世界」ということに興味を持つようになりました。知りたい気持ちや勉強したい気持ちが出て、すごくいいことだと思います。ありがとう日本、私の世界の扉。

# 砂丘のアリジゴクとつき合って

理学科教授 松良俊明

いつの頃からか、「野外で昆虫を研究する仕事に就きたい」と漠然と考え、紆余曲折を経て今日まで来ました。30歳直前に本学に就職でき、以来30数年がたちます。日々の仕事に追われてきたのですが、改めて過去を振り返ったとき、子供の頃に描いていた夢を実現させて生きてきたのだと思い至りました。日本では「昆虫の生態を研究している」と「告白」すると、ひと昔前は何とも言えない反応が返ってきて、奇異な人物と見られているなど感じたものです。確かに、アリジゴクについて熱く語る私は、一般的には変な人かも知れませんが、しかし考えてみれば、大学教員というものは、ある一つのことに専念する「変な人」の集まりともいえましょう。

## 研究の出発点

私は大学院生のとき、二人の仲間とともにカマキリの生態研究を始めました。一緒にやろうと言い出したのは同級生の故・井上民二君でした。彼はその後熱帯雨林の研究へと転じたのですが、ボルネオ島にある調査地へ赴く途中、飛行機事故で亡くなりました。京都大学生態学センター教授として、世界的な学者になっていたのに本当に残念なことでした。もう一人のH君は、当時4回生でしたが、昆虫では飯が食べないからと、賢明にも医学部に入り直し、医者になりました。私はといえば、本学で職を得てその後もカマキリの研究を細々と続けました。

カマキリは生きた昆虫などの餌動物を捕らえて生活する「捕食性昆虫」といわれるグループの一員です。また、自ら積極的に動き回るのでなく、餌が近づくのを待っている「待ち伏せ型捕食者」です。捕食性昆虫の生態や行動は、生きた餌を毎日大量に確保しなければならず、そのためかあまりその研究が進んでいませんでした。カマキリの若齢幼虫に与えるショウジョウバエは飼育が比較的容易で、それほど苦にならなかったのですが、大きくなって以後に与えるイエバエを毎日大量に発生させるのには苦労しました。容器の中で密集して動いているウジは、それらの餌ともども悪臭を放ち、大学構内の隅にあったボロ小屋でヤブ蚊に苦しみながらウジを大量飼育しておりました。カマキリにバエを与える作業は学生諸君にしてもらい、私は裏方にまわることに徹しました。カマキリが一体どれくらいの餌を食べ、何回脱皮して成虫になるのか、そし

て雌は何個の卵を産むのかといったごく基礎的なデータも何とかまとめることができました。

## アリジゴクとの出会い

日本海に面した京都府北部の海岸は出入りの激しい海岸線ですが、丹後半島の西側基部から久美浜湾湾口にかけての数キロメートルは白砂青松の美しい砂浜が続いています。丹後砂丘と呼ばれるなだらかな砂丘が広がっているのです(写真1)。日本の海岸の多くは、コンクリート護岸やテトラポットなどで人為的に改変された「人工海岸」や、すぐ背後に道路などが敷設された「半自然海岸」であり、人為の全く及んでいない「純自然海岸」の比率は、約26% (島部を除く; 1994年環境庁調査結果) でしかありません。



写真1. 箱石浜

この丹後砂丘の海岸は全国的に稀な純自然海岸であり、しかもそこには30種をこえる海浜植物が群落地をつくっています。その砂丘の一角に本学附属施設である「久美浜フィールドステーション」がありました。過去形で言った理由は、すでに数年前に廃止されたためです。本施設は「臨海実験実習室」という名称で1972年に設置されました。夏の臨海実習や研究活動の場であるとともに、教職員の福利厚生施設としても位置づけされていました。

私は赴任1年目の夏に初めてこの地を訪れ、海辺の美しさに感動しました。波打ち際の背後にはなだらかな丘が続き、クロマツ林へと変化します。砂丘の斜面にはハマゴウやハマヒルガオ、ハマボウフウといった海浜植物がはえ、季節によって紫やピンク、黄色の花々が、高山植物のような可憐さで密かに咲いていました。このような砂丘のあちこちに、場所によっては足の踏み場もないほどの密度でアリジゴクの巣穴があ

アリジゴクというのはウスバカゲロウ科という少しトンボに似た昆虫の幼虫を指します(写真2)。砂地に逆円錐状の巣穴を掘り、その底で餌の到来をじっと待つ捕食者です。カマキリ以上の典型的な待ち伏せ型捕食者ゆえ、当時カマキリの研究に没頭していた私ですが、当然この砂丘性アリジゴクに強く興味を引かれました。本種の和名は後にクロコウスバカゲロウと呼ばれるようになりました。うれしいことに、この地にはさらに3種のアリジゴクが生息し、それらはいずれも巣穴をつくらない非営巣性の種なのでした。そのうち一種オオウスバカゲロウは日本最大のアリジゴクです。これらのアリジゴクやその成虫を相手に、野外調査をしたり、実験室で実験したりして長年つき合うことになりました。

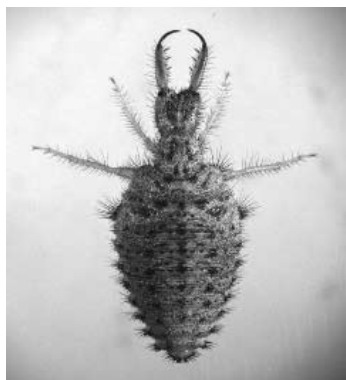


写真2. クロコウスバカゲロウ幼虫

### 箱石浜の自然と思い出

フィールドステーション近くの浜は箱石浜と称され、直線状に切り落とされたような堆積岩が砂浜の所々に存在していました。実習の合間には岩場近くを潜って、磯に住む動物を観察することもでき、実にありがたい海岸でした。砂浜の東側には、海水浴場でもある浜話海岸<sup>はまづめ</sup>が見え、今では「カニと温泉と夕日」で有名ですが、以前は小さな民宿の点在する素朴な集落でした。この辺りの海岸は、京都府でも唯一温度の高い湯の出る温泉で、昔は海水浴場に大きなプラスチックのバスタブが置かれ、私も何度か海水浴で少し冷えた体をその温泉に沈めたことを憶えています。その後浜話の民宿は建て替えられて大きな旅館群に変貌していきました。

こちら辺りの浜は「夕日ヶ浦」と名づけられた通り、オレンジ色の輝きを水平線にゆっくり落としてゆく夕日の美しい海岸です。私には夕刻のひとつとき、波の音を聞きながら、波打ち際を散歩することが至福の時でありました。もちろん魚好きな私には、その季節に旬を迎えた地魚の刺身をあてに一杯飲むことも、また同様な至福の時ではありました。

しかしこの浜辺にも気がかりなことが二つありまし

た。一つはオフロード車による植物群落の破壊です。2、30年前は今ほどオフロード車は普及していませんでしたが、車が砂浜を傍若無人に走り回ったために、あちこちで植生が無残に破壊されつつありました。重い車体で海浜植物のはえる斜面を駆け上がったため、砂地がえぐり取られ、その後は時間とともにどんどん傷は広がるばかりでした。中にはほぼ完全に破壊され、サーキッド状のようになった場所もありました。

本地域は山陰海岸国立公園の東端に位置してはいるのですが、このような自然破壊に対し具体的な術を見いだせない状況でありました。幸い、とあることで知り合いになった新聞記者が、この問題を記事にしてくれたことが出発点となり、最終的には環境庁(当時)により「乗り入れ規制区域」という設定がなされ、その後は車の浜への侵入はなくなりました。

気がかりだったもう一つのことは、浜辺に大量に押し寄せる漂着ゴミのことです。海流によって運ばれるプラスチック類や発泡スチロールなどのゴミは、打ち上げられたまま腐敗することはありません。ゴミ片に書かれた文字から、それらの多くは中国や韓国からのものようでした。漂着ゴミ問題は全地球的な問題であり、日本からも太平洋へ向け流されていることがわかっています。

1997年1月にロシア船籍のナホトカ号が島根県隠岐島北方で座礁するという事故がありました。大量の重油がこの浜にも打ち上げられました。それらは波の作用により固まり、微小な粒から座布団のような大きさにもなって浜一面に漂着しました。被害は石川県から山陰海岸まで及び、全国から漂着油の回収のためのボランティアが多数参加され、浜は再びほぼ元のように戻りました。本学からも学生や教職員が参加し、最初は途方にくれてしまうような状況でしたが、月日とともに回復の様子を見て、私は人力のすばさを改めて感じたことでした。

丹後砂丘にいるアリジゴクの生態調査から始め、やがてオーストラリアや台湾などへと足を伸ばし、それぞれの地に生息するユニークなアリジゴクにも出会うことができました。そして再び、比較的近場にある木津川の中州でも数年間調査を行ってきました。改めて振り返ったとき、時間と労力をかけ調査や実験を続けてきたものの、得られた研究成果は大したことはないかもしれません。これでよかったのだろうかという反省の念とともに、心地よい海風の吹く砂丘で野外調査をした頃の思い出がよみがえり、アリジゴクたちと出会った我が身の幸運を感謝したい気がするのです。

## 80年代の思い出

体育学科教授 和田 尚

1980年4月、阪大助手から本学に転任して早32年が経とうとしています。これまでの人生の半分を本学で過ごしたことになると思います。その年は日本が参加をボイコットしたモスクワオリンピック開催の年でした。ずっと同じB棟二階の研究室の窓から見える光景は、樹木が大きくなったためずいぶんと変わりました。正門のクスノキや西門側のメタセコイヤ並木も当時はそれほど大きいとは感じませんでした。改めて見上げるとその大きさに驚きます。当時は国立大学の授業料が年180,000円、一ドル200円前半の時代でしたから隔世の感があります。この与えられた機会に、今とは異なっていた80年代の懐かしい思い出を中心に書かせていただくことにします。

所属した体育学科は教員数が12名で、年配の教授が多く圧倒される雰囲気でした。学生のみならず年齢も近かったし体力もあったので、一緒に練習したり勝負したりしてスポーツを楽しんだのも良き思い出です。今では考えられないことですが、当時は各学科に事務担当の職員がおられ、事務的なことはすべてお世話になっていました。確か理髪店も生協の一角にありました。



スキー実習（新赤倉スキー場）

全学の学生定員は420名で体育学科は特修体育学科（30名）と体育学科（20名）の50名の定員でした。開講科目も実技科目や実習科目が多く、専門性を高めるという面では恵まれていたと思います。入学試験の受験者も体育学科総数で毎年250名前後おり、当時は今のように前・後期日程に分かれていなかったため、実技試験は活気がありました。

全学の教員就職率は70年代は75~86%で推移し、80年代に入ると80年の72%を最高に年々低下しました。その当時は中学、高校への採用もかなりあった

と記憶しています。最近は採用数も増え就職率も上がる傾向にあるので安心しています。教育実習は4回生の前期にA班とB班に分かれて5月と6月に4週間実施されていました。四回生で主免実習を行うことや期間が連続して長かった点は、一回生からの積み上げ型の実習が行われている現在とはずいぶんと異なっています。クラブ活動も盛んで、多くの学生が加入し活動していました。特に陸上、サッカー、男子バスケットボール部は人数も多く、上位で活躍していました。全体的にのんびりとし、学生諸君は青春を謳歌していた印象をもっています。

そのころの大学の行事に天橋立での水泳訓練がありました。夏休みに入ってすぐの7月16日から21日までの5泊6日の長期の合宿訓練でした。当時は7月10日頃から2カ月間夏休みに入り、9月に2週間授業を再開しその後前期テストが行われていました。①全学生の皆泳、②教師の資質としてのプールや野外での水泳指導、③一回生の集団生活の体験と指導の三つの目標が掲げられ、小学校教員養成課程（第一類）と特修体育学科の必修科目として行われていました。80年度は、268名の学生と、教員21名（体育学科を含む）、職員17名と水泳部を中心とした泳力のある上回生（助教）17名の計323名が三つの宿舎に分宿するという大掛かりな合宿訓練でした。

午前と午後約2時間ずつ17班に分かれて水泳訓練を行い、夜は班別ミーティングと講義が行われました。5日目は最大の目標である約3Kmの遠泳が行われました。途中で潮の流れが変わり、方向を変更するというアクシデントにも遭遇しました。隊列を組み名簿を作



水泳訓練の様子（上：練習風景、下：遠泳）

るのに前夜は助教を中心に苦勞をしたものです。

完泳が少し難しそうな学生も参加したので、途中であきらめざるをえない人もいました。若かった私は漁師が漕ぐ警戒船に乗り、引き上げ役をしました。みんなで「エーンヤコーラ」の掛け声を合唱しながら、気持ちを一つにしてゴールを目指しました。完泳後、満面に笑みをうかべたり涙を流したりしながら上陸する姿は感動的なシーンでした。水泳の得意な林学長が遠泳の先頭を泳がれたことや、自身の南極越冬隊員の経験をユーモアたっぷりに話された蜂須賀学長の講義は懐かしく思い出されます。

最後の晩は近くの小学校の校庭でキャンプファイヤーをしました。点火は小高い丘の電柱から30メートルほど針金をはり、火のついたカンを滑らせるという幻想的な演出をしたこともあります。36回続いた行事は91年に幕を閉じましたが、5泊に渡る学科を越えた学生・教職員の交流は、その後の学生生活に大きな影響を及ぼしたと思っています。卒業生の多くが懐かしく思い出すのもそうしたことがあったからでしょう。

そのころ毎年8月中旬に全学教職員ソフトボール大会がレクリエーション行事として行われていました。平日の一日を使い、部局単位か連合でチームを組み、大学教員、事務職員、附属教職員から毎年8～9チームが参加して盛り上がった行事でした。私も毎年参加しハッスルプレーをしていました。終わったあとの懇親会でのビールの味は格別でした。正門を入れてすぐ左の空き地とF棟のあたりにテニスコートが4面あり、多くの教職員がテニスを楽しんでいたのもこの頃です。テニスの愛好者も多く、昼休みにはテニスコートがにぎわっていました。私はスポーツが好きだったので、スポーツを介して多くの方々と親しくさせていただきました。

着任後の10年ほどは大きな改革もなく全体としては落ち着いた時代で、のどかでゆったりできた時期でした。施設設備面での充実もなされ、80年に講堂、84年にF棟が完成し、運動施設でも82年に50メートルプール、83年に今の北側テニスコートができました。

80年代末からは総合科学課程の設置、大学院の発足に始まり、学部改組、法人化等それまでにない変化が起こり現在に至っています。平成に入って以降、大学は大きく変わりました。これから先も変革が求められることがあるかもしれませんが、教育大学として優秀な教員の養成を実現し続けていきたいと思っています。

スペースに余裕があるので、以降は90年代の忘れ

ることのできない二つのことについて書かせていただきます。一つは、96年4月から10カ月間カナダのウエスタンオンタリオ大学（オンタリオ州ロンドン市）で文科省の在外研究員として生活したことです。最初の頃は異文化での生活に戸惑いましたが、カナダの自然に触れながら大学の用務から離れて研究生生活を送れたことは貴重な経験でした。機会を与えていただいたことに感謝しています。

二つ目は98年4月から4年間、附属京都小学校の校長を併任したことです。99年NHKの「課外授業 ようこそ先輩」で卒業生の貫戸朋子さん（日本で最初の国境なき医師団の医師）が「戦争を学ぶ、命を考える」というテーマで授業をされ、その番組が国際エミー賞（子ども・青少年部門）を受賞したことは感動的でした。2002年2月は創立120周年にあたり、記念行事に参加できたことは大変光栄なことでした。2001年6月に起こった附属池田小学校の事件は大変な衝撃でした。その後のさまざまな対応で慌ただしい日々を送ったことも思い出されます。

緑がいっぱいでアットホームな雰囲気の本学での生活は、私にとって充実した年月でした。現在は定年後のマスターズ陸上参戦を目指して、少しずつアスリートモードにチェンジ中です。

（引用：京都教育大学120年史、体育学科沿革史）



ウエスタンオンタリオ大学の構内にて



京小120周年記念人文字

# ホンドギツネ@京都教育大学

理学科教授 梶原裕二

京都教育大学のキャンパスは市街地にありながら豊かな自然環境が保たれています。ケヤキ、フウ、メタセコイアの並木など構内は多くの樹木に被われており、多種の野鳥が訪れたり、時にはタヌキが出没したりします。加えて、今年の春から新たにホンドギツネが現れるようになりました。2匹のまだ若いキツネで

す。キャンパスは東山の南麓に位置し、周辺には稻荷山があります。その辺りに生息していた個体が移って来たのかもしれませんが、時折、学生や教職員が見かけることもあり、野生のキツネを見る貴重な機会となっています。写真は2011年6月17日午後6時頃に撮影したものです。





# 子どもたちの9ヶ年の育ちを見つめる

附属京都小中学校初等部副校長 戸田和樹

学校

1年女子

1日目はあまり楽しくなかった  
2日目はちょっと楽しかった  
3日目はもっと楽しかった  
4日目はもっともっと楽しかった  
行くたびにどんどん楽しくなっていく  
友だちもたくさんできた  
しゅくだいもふえた  
じゅぎょうもだんだんすきになってきた  
この学校が大すきになった  
(京都新聞「季節のエッセイ」5月掲載)

小中一貫学校としてスタートした昨年度の1年生が書いた詩である。入学した当初の不安感、緊張感の日を経るごとに和らいでいく。親や友だち、先生など多くの人の力を借りながら宿題にも慣れ、授業を楽しんでいるようになっていく。子どもの日々の成長が手に取るように分かる作品である。

最後の一行「この学校」と示された学校は、かつての京都小学校ではない。4・3・2制9ヶ年一貫学校としての附属京都小中学校である。

この詩が書かれたのが12月であることから、8行目と最後の9行目の間には大きな飛躍があり、「大すき」という言葉の背景に、この人が12月までに経験した教室での体験や全校対面式、紫翔祭（スポーツフェスティバル）、紫友祭（附属フェスティバル）などの活動が存在していることがうかがえる。



また、小さな1年生に「この学校が大すき」と言わしめる要素には、こうした学習活動ばかりでなく、人間環境や施設・設備・備品（教育環境）の充実なども上げられよう。小さな子どもではあっても、それなりに学校の全体像を見通しながら言葉を選ぶものである。こうした子どもの声を目にし、耳にするたびに、私たち教師は、子どもたちの思いや期待に応えるべく、日々の教育と教育環境の充実に邁進せねばならないと思うのである。



さて、昨年度、本校は大きな3つの施設の改修と新設を行った。

1つ目は、東エリアの講堂の改修である。中学校3学年400人を収容していた座席数を5年生から9年生まで600人が収容できる環境に改修した。そのことにより、入学式や卒業式等の儀式をはじめ紫友祭等の文化行事は東西エリア2会場で開催できるようになった。

2つ目は、東西エリアを結ぶ連絡橋の新設である。両エリアの行き来に安心感があり、生徒・教員共に交流が盛んになってきている。

3つ目は、西エリアにできた中高等部図書館である。従来、特別支援に組棟として活用していた建物をお茶室も供えた多目的図書館棟として改築した。かつての中学校図書室に比べ蔵書も増え、明るくのびのびした環境の中で学習ができるようになった。

こうした施設の充実をはじめ、子どもたちの育ちを9ヶ年見守り続けるためにはまだまだ改革をせねばならないことが山積してはいるが、本校は着実に2歩目の歩みを進めてきている。

## ロボカップ世界大会2位(ジュニアサッカーB部門)

附属高等学校副校長 齋藤正治

2011年7月4日夜、関西空港よりイスタンブールへ出発しました。4名の生徒達は前日までロボットの組み立てやプログラミングに取り組み、調整の余地を残しながらも最後まで性能向上させようという気持ちとともに。

昨年の6月24日、本校電子工学部ロボカップチーム  $e^{\wedge}\pi i+1$  (ZERO) が、表記の大会で3位となりました。現電子工学部部長の山岸信博(2年生)は、この世界大会に出場した経験を有します。今回は、辰巳颯一、田中秀典、大前瞭太らの2年生とともに2月の京都大会、3月の京滋奈大会、5月の全国大会をすべて優勝で勝ち進んでの出場です。

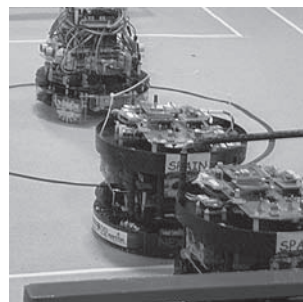
ロボカップのサッカーは、リモコンなどでロボットを操作するのではなく、一旦スイッチを入れた後はロボット自身で判断して相手ゴールにボールを蹴りこむものです。本校のロボットは方位センサー、赤外線センサー、超音波センサーを有し、ソレノイドアクチュエーターでボールをキックします。また、4個のモーターをパルス変調でドライブします。これらの制御はマイコンにプログラムを書き込んで行います。

昨年は、ジュニアサッカーA部門での出場でしたが今年はB部門での出場でした。B部門はA部門の上位部門で、A部門のフィールド(122cm×183cm)の外側に30cmずつのアウトフィールドが設けられています。つまりコートが約2倍の面積になるほか、人間が実際に行うサッカーと同じくラインアウトのルールが存在します。ロボットにはA部門の機体に比べて広いコートを素早く動くことやラインアウトに対応するボールコントロールなどが要求されます。そのために強力なモーター、低重心、グリップの良いホイール、そして長距離のシュート力を備えることが必要です。もちろんそれらの動作を制御するためにさらなるセンサー類の装備とプログラムの改良も必要でした。

昨年の成果はあるものの、上記の要求を満たすためにロボットを一から作り直すことになりました。また、予算の範囲内で性能を追求するために、市販パー

ツを組み合わせて組み立てることにこだわらず、部品製作・加工なども行うことにしました。

山岸君は2010年8月に、本校SSH事業の一つで京都教育大学の全面的な協力で実施された「京都市サイエンスワークショップ」の化学領域に参加していました。このワークショップにおいて、彼はセンサープロジェクトの指導をしておられた本学産業技術科学科の関根文太郎先生と出



会しました。部品製作や加工には、関根文太郎先生をはじめ赤尾修二先生にも多大なご協力とご指導をいただきました。ものづくりに不慣れな生徒達に、ボール盤、バンドソー、旋盤などの使用方法の指導や安全管理まで、休日返上で半年以上の長きにわたってご支援いただきました。

さて、ロボカップジュニアではパーツやプログラミングなど機体の仕上がりが良いだけでは必ずしも勝てない、という場面も多々ありました。大会は全て英語で運営されているので英語力はもちろんのことなのですが、意思表示や交渉力も重要でした。英語で書かれたルールに熟知し、ルールと異なる行為や新たな連絡事項などあらゆることについてアンテナを張り巡らしていなければなりません。また、「ジュニア」という名称がついているのは、われわれ「おとな」が介入できないという意味でもありました。実際にジャッジミス、集計ミス、時間計測ミスなど様々なハプニングがありました。生徒達はそれらを見過ごすことなく指摘し、相手チームや審判と交渉、お互いが納得できる解決策を提案し乗り越えていました。これらの力がなければ、予選で敗退していたでしょう。

この様に考えると、今回の成果は日々の生活のすべてがいかにされた結果であるように思えてきます。そしてそのようになる生活態度であったからこそ多くの方々の支援をいただけたのだとも思っています。彼らの今後の益々の精進と活躍を期待しています。



# 中学部 白馬修学旅行

附属特別支援学校副校長 春原克彦



中学部は、修学旅行で白馬に行きます。白馬八方尾根登山が大きな目的です。今年の修学旅行は、5月24日（火）～5月27日（金）、台風2号の過ぎ去った直後、大陸の涼しい高気圧が張り出した絶好のコンディションに恵まれました。空気は澄み渡り、里からも雪渓と山巒がくっきりと見えました。

登頂当日5月25日、空は青く晴れ渡り、凜とした空気が張り詰めていました。八方山麓駅で、ゴンドラに乗りうさぎ平、そこからケーブルで八方池山荘に、いよいよ登山です。目指すは八方池、片道約3km 標高差230m（1830mから2060m）。しばらくガレ

場の急坂が続きます。白馬三山が登山者を見下ろします。

ところで、本校では、中学部から自主通学になります。今年の中学部3年生も、これまでの2年間自宅から京阪墨染駅あるいはJR藤森駅に行きそこから墨染通りを登って登校し、反対の経路で下校してきました。中学部には、歩け歩けと言う行事もあります。比叡山を京都側から滋賀県側に抜けるルートを歩きます（途中ケーブルカーに乗る生徒もいます）。

歩くということは、ヒトの基本動作です。二足歩行とヒトの進化の深い関係については様々な指摘があります。二足歩行と手の機能分化、更に大脳の特異な発達など、二足歩行は人間的な力の基盤となっておりともいわれています。こうした身体機能面の成長だけではなく、この登山は、先生やクラスの仲間で支え合い一緒に登ることも大切にしています。決して登らされる登山ではなく、自分を励まし、友だちを励まし、そして友だちに励まされ登るのです。少し話が大きくなりましたが、本校の中学生にとって八方尾根登山は、いろいろな意味で一つのピークであると考えます。今年も天候にも恵まれ生徒たちにとって鮮やかに印象に残る登山であったと思います。

## 八方山(行程)



もう少しで八方池だ、頑張ろう！

八方池での昼食おにぎりが美味しい。



新任の先生  
から

4月に着任いたしました。3月までは7年間大井川左岸に住んでいました。その前は、千曲川左岸、信濃川左岸、那珂川左岸、番匠川左岸、セーヌ川左岸などです。教育と福祉と親密に連携しながら四半世紀にわたって思春期の子ども達と話して参りました。思春期臨床には川と先生方と福祉と医療とのネットワークができていました。そして鴨川左岸での生活が始まりました。鴨川とセーヌ川、お寺と教会が違いますが、それ以外は極めて共通しているように感じています。写真はこの1月のセーヌ川左岸のサルペトリエール病院

保健管理センター教授 森 孝 宏

です。昔フロイトが何度も聴いたであろう同じ病院内チャペルで、患者さんや職員に混じってパイプオルガン演奏会を聴いた帰りに撮りました。川の流れと同じく、臨床も学問も人も永遠につながっていくことが身にしみました。どうぞこれからよろしく願いいたします。



教育支援センター教授 桶 谷 守

本年4月よりお世話になっております桶谷守と申します。3月末までは、京都市の教育相談総合センターに勤務しておりました。私の専門は生徒指導と教育相談です。



世の中が急速に変化し、そのスピードについていけない子どもたちに「生きづらさ」が感じられ、「虐待」「不登校」「問題行動」など、様々な問題が起きています。その要因の一つに、「人と繋がれない」ことがあるように思われます。また、現場の先生方に聞いてみる、①発達障害など特別な支援を必要とする子どもへの教育の在り方 ②学力の格差、一人一人にどのように力をつけるか ③どのように規範意識を培うか ④理不尽な要求をしてくる保護者のへの対応 などが課題として挙げられました。

その他、最近の気になる子どもの姿や意識として、

「自己中心的で、問題が起これば、自己の正当性を主張し、責任を他に転嫁する」「コミュニケーションの不足から、人とのかわりが苦手」「傷つきやすい反面、人を傷つけることに鈍感」「自分に自信がもてず、考えや行動の判断基準を周囲の意向に求めようとする」などが挙げられました。こういったことから、もう一度、学校教育の原点に戻り、集団の中で子どもを育てることを考え直す必要があると思われまます。「すべての子どもたちに、何がアンフェアで、何が人権侵害なのかを教えることが大切です。まっとうに人間として生きていくための人と人のつながり方を教えることこそが教育である。学校は、多種多様な生活を背負って通ってくる子どもたちが、集団で生活している場であり、価値観も個性も異なるがゆえに、対立は必ず起こる。問題はその対立を起こさないようにすることではなく、対立の超え方を集団で学びあうことである。」と改めて考えています。

## 教育支援センター准教授 小林 稔

教育支援センターに着任しました実地教育担当の小林稔です。これまで、小学校教員を12年、大学教員としては10年の経験がございますが、生まれ故郷の関西で勤めるのは、今回が初めてということで大変嬉しく思っています。今は毎日車窓からみる四季の移り変わりを楽しみながら、大学に通っているところです。さて、私が担当する実地教育は、どの大学でも何らかの課題を抱えているのではないかと考えられますが、特に、わが国の教員養成機関では、諸外国に比べて実地教育の期間が短く、学校現場の山積する課題に対応するには、十分でないとの認識が近年高まってきているかに思います。量的な不足は、質で補うしかなく、その意味では本学の実地教育の充実と改善に向けて、責任の重さを痛感するばかりです。さらに、研究という視点からすれば実地教育や教師教育の分野は、未だ緒についたばかりなので、今後さまざまな方向性への拡がりが見られます。私の最近の研究を一つ紹

介させていただきます。教室で10分間、実際に子ども前で話をする場面の教師や学生の「眼の動き」を眼球運動測定装置という機器を使って測定し、15年以上の経験を有するベテラン教師6名と教育実習に参加する前の2回生13名を比較しました。ベテラン教師は学生に比して、ゆっくりと眼を動かし、ただし、静止する際には、長い間1点を見つめる傾向がありました。この傾向は実践で身につけたベテラン教師の特長なのでしょう。当然、教育実習後、あるいは卒業時点における学生の場合は、ベテラン教師の数値に近づくものと推察されます。その数値がどの程度近づくかについては興味のあるところで、将来的には到達目標の設定に応用できるかもしれません。最近、教員養成の質保障に関する話題が多くなっていますが、本学学生の教育実践力の向上のために微力ながら貢献することができればと思っております。

どうぞよろしく申し上げます。

# 大学生活での三つの目標を振り返って

東大寺学園中高等学校・教諭 安井直人  
(国語科教育専攻 平成19年度卒業生)

大学入学直後、四年間を有意義に過ごすために僕は三つの目標を立てました。

ひとつめは、専門分野において大学で一番の知識を身につけることです。大学は学問をする場所ですから、必死に勉強しなければ自分がそこにいる意味はないと感じていました。この小さな大学で一番になれば、自分がサボっている証拠だとも考えました。非常に生意気な考えで、自分は随分と失礼な学生だったろうと今となっては思います。専門分野は後に恩師との出会いで漢文学となりました。本に囲まれた研究室で朝から晩まで古人の思想と向き合っていた経験はとても貴重なものでした。

ふたつめは、ハンドボールの戦術とチームマネジメントのノウハウを習得することです。中学からハンドボールを続けていましたが、選手としての実績はないに等しく、様々な観点から研究しなければ強いチームを作ることはできないと思っていました。大学でも目

覚ましい結果を残すことはできませんでしたが、仲間との出会いに恵まれ、スポーツと教育をつなぐ大切な視点を得ることができました。今、ハンドボール部での指導では、自分の想像を超える子どもたちの成長ぶりに、毎日感動させられています。

みつめは、友人のK君を本好きにさせることでした。彼は、教員を志しているにも関わらず、大学生になるまで読書を全くしてこなかったと豪語していました。彼を本好きにさせられなければ、子どもを本好きになんてできるはずがないと思い、あの手この手で読書の魅力を伝えていきました。彼は今、将来本屋さんを開きたいと語るほど本を愛しています。

大学生活での目標の達成度は70%という感覚でしたが、教員として働くに際して、新たに三つの目標を立てました。紙幅が尽きましたので、具体的に述べられませんが、今、目標に向かってとても充実した時間を過ごせています。

## 人に育てられる、そして人を育てる

附属京都小中学校・教諭 梅村万里子  
(特修美術科 平成12年度卒業生)

縁あって今年度から、附属京都小中学校で勤務することになり、大学生時代に教わった先生方にもお会いする機会がありました。私の恩師の先生は、数年前に他界されているので、もし生きておられたらどんなに喜んでくださっただろう…、と思うと目が赤くなりました。

卒業してからは、図工専科の講師として学校を掛け持ちして勤務する日々でした。そこで会う子どもたちは、全員かわいくて、「この子達のために、より良い題材を、もっと良い指導方法を！」と思う毎日でした。しかし、教師になる自信がないままでした。しかし、その中で出会った先生方の言葉や、高校時代からアドバイスを受けている先生の励ましで、「やっぱり教師になろう。」と決意できたのでした。

京都市で勤務しているときは、図画工作科の研究会にも入り、専門性を磨かせてもらうチャンスに恵まれ、楽しく活動できました。そして現在、大学で学ん

だことも忘れないように、二科展にも毎年出品しながら、子ども達と多忙な中にも充実した毎日を過ごせています。今の自分があるのは、たくさんの先生方に育ててもらったからだなあ、と実感しています。

先日、初めての教え子から、就職したとの知らせを受け取りました。自分のことのように嬉しくなり、その時に思ったのです。一人を育てることは、長い目で、真剣に目の前の人と向き合うことなんだー 自分がしてもらったこと以上に、子どもたちに、もっともっとかえしていきたい、と実践を重ねる日々です。

天国におられる先生、きっとひやひやされているでしょうけど、厳しく温かく見守ってください。



## 「やまなし」の白い石

京都教育大学名誉教授 井本伸廣

ここ4年ほど、毎年9月になると、瑠璃溪近くの南丹市立西本梅小学校6年生に「瑠璃溪の火山活動」について授業をしてきている。はじめに軽石を水に浮かせ、「どうすれば沈むか」と質問する。意見交換するうちに、小さく砕いて軽石に閉じ込められている空気を除けば沈むはずだ、ということになる。実際に鉄床かんとこの上でハンマーを使って軽石を砕き、再び水に入ると、小さくなった粒はビーカーの底に沈み始める。子どもたちは、重いはずの石が水に浮かぶ謎が解けて、その後続く「火山活動」の授業に熱心に耳を傾けてくれるようになる。

こんなこともあった。

15年ほど前、京都の小学校6年生であったフランス人のアリアン・ラヴェルさんからわたし宛に一通の手紙が届いた。その手紙には、「宮沢賢治の『やまなし』に、『蟹の子供らはもうよほど大きくなり、底の景色も夏から秋の間にすっかり変わりました。白い柔らかな円石まるいしもころがって来、小さな錐すいの形の水晶の粒や金雲母きんうんものかけらも、流れて来てとまりました』と書いてありました。『白い柔らかな円石』は、本当に柔らかい石なのか、柔らかそうな石なのかわかりませんので、どうか教えてください」と書かれていた。石は硬いというイメージにそぐわない、「柔らかな」という記述への素朴な疑問が感じ取れた。

二、三日後、次のような返事を届けた。

「すてきなお手紙ありがとうございました。『やまなし』の一節にある『白い柔らかな円石』は、本当に柔らかい石なのか、柔らかそうな石なのかというご質問ですが、わたしには『柔らかい石』がパッと浮かびました。それは大理石です。ここは大理石でなければならぬ、とまでおもいました。

白い石はいろいろとあります。水晶もそのひとつです。しかし賢治さんは、『小さな錐の形の水晶の粒』とつづけていますから、水晶でないことは確かです。そのほかの白い石には、長石があります。しかし、長石には、ある形に割れやすい劈開へきかいという性質があって、円くはなりません。白いチャートも、イーハトーブの川にはたくさんあるとおもいますが、チャートは水晶の小さな粒でできている石ですから、柔らかくはありません。昔のひとは、チャートを火打石や石器に使ったほどですから。もっとほかの白い石にはめずらしいものが多く、川の底をころがって来ることはないでしょう。

ところで大理石は、方解石という鉱物の粒でできて

います。鉱物の硬さを調べるとき『モースの硬度計』を使います。これは、硬さのちがう10種類の鉱物を選び、硬度計の鉱物で調べたい鉱物の表面を引っ掻いたときに、その表面に傷がつくかどうか、また反対に、その鉱物で、硬度計に選んだ鉱物が傷つけられるかどうか、比べるものです。硬度1は滑石。わたしたちの子どもの頃には、滑石で地面に絵を描いて遊びました。爪でも傷がつきます。硬度2は石膏、3が方解石です。方解石は、柔らかいほうから数えて3番目の鉱物なのです。方解石の粒でできている大理石を『柔らかな石』の候補にあげても、そんなに無理はないとおもいます。しかも方解石は真っ白なことがほとんどです。

硬度のことについて、もう少しつづけます。硬度4が蛍石、5は磷灰石りんかい。わたしたちの歯は、磷灰石の細かな結晶でできています。もうだいが硬くなってきましたね。6が長石、7が水晶です。ガラスに傷をつけることができます。8は黄玉おうぎよく、トパーズともいいます。9は鋼玉こうぎよく。ルビーやサファイアはこの鉱物のうちで美しい宝石のことです。そして硬度10がダイヤモンドです。

方解石の細かい粒が集まってできた大理石は、川の底を転がるうちに角がとれて『円石』となり、蟹の子どものそばにきました。水晶も金雲母もいっしょに。雨上がりの校庭で、きらきら光っている鉱物が金雲母です。

イーハトーブを流れる北上川には、東側の北上山地からいろいろな石が運びこまれます。北上山地には大理石のもとになる石灰岩がたくさんありますし、それがかこう岩マグマの熱でやかれて、大理石にも変化しています。石っこ賢さんは、そんなことをよくよく知っていました。少しいたずらっぽく、わざと大理石といわずに、『白い柔らかな円石』となぞかけをしたのではないのでしょうか。あなたもわたしも、すっかり賢さんのしかけにとりこまれてしまったのかもかもしれません。楽しいお手紙、ほんとうにありがとうございました。」この手紙には、白い大理石の円石と錐の形の水晶、金雲母を添えておいた。

このような、石をめぐる子どもたちとの交流は、わたしにとって今も忘れられない。これからの限られた人生にも、こうしたふれ合いが生まれることを願っている。そして私自身、中学生の時に伊吹山で化石を含んだ石灰岩に出会って以来、いろいろな石たちと60年もの間、友達になれたことに心から感謝している。





## 第 128 号の読者の皆さまへ

京都教育大学広報誌「KYOKYO」をお読みいただきありがとうございました。

より良い広報誌を作成するため、皆さんからのご意見・ご要望をお待ちしております。

広報誌のご感想や今後取り上げてほしいこと、質問したいことなど何でも結構ですので、下記までお寄せください。

〒 612-8522

京都市伏見区深草藤森町 1 番地

京都教育大学企画広報課気付「地域連携・広報委員会」

E-mail : kouhou@kyokyo-u.ac.jp

## 128 号編集後記

武蔵野委員長の後任として、新たに地域連携・広報委員会委員長に就任しました細川友秀です。

現在の京都教育大学の様々な情報を広報紙「KYOKYO」を通じて、皆さんにお届けしたいと思います。

本号(第 128 号)の特集は『教員養成高度化に対応する附属学校の教育実習スーパースクール化構想』です。

本学は、より質の高い教員の養成を目指して、「教育の理論と実践に関する優れた能力を育成するための学部・大学院を見通した体系的な教育課程を編成する。」を第 2 期の重要な中期目標の一つとして掲げています。この目標を達成するための具体的な計画の一つとして、昨年度に「教員養成高度化に対応する附属学校の教育実習スーパースクール化構想」プロジェクトを文部科学省に申請し、認可されました。今年、プロジェクトの初年度が動き始めていますので、今号の特集では、このプロジェクトをご紹介します。

なお、今号の表紙を飾るのは附属高等学校の高尾沙織さんの作品、裏表紙は同じく高等学校の島崎優奈さんの作品です。食物の秋・芸術の秋にまさにぴったりな作品をお楽しみください。

地域連携・広報委員会委員長 細川 友秀



京都教育大学

### 地域連携・広報委員会

委員長	細川 友秀				
副委員長	相澤 雅文				
委員	齋藤 正治	吉江 崇	丹下 裕史	浅井 和行	
	荻野 雄	奥村 真紀	奥野久美子	富家 健治	
事務担当	企画広報課				



京都教育大学広報 第128号

発行日  
2011年10月21日

編集  
地域連携・広報委員会

発行  
京都教育大学  
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1  
電話 075-644-8125  
<http://www.kyokyo-u.ac.jp/>